日常?聞いたこともない言葉ですね…

sorusu

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

……こんなはずじゃない。

俺は、中谷陽介はただなんてことない日常を過ごしたかっただけなのに…

なんでこんなことになったんだ!?

人生とは苦難ではない。人生とは天国と地獄の狭間である　ｂｙ　ｓｏｒｕｓｕ

目次

日常 ―― 1
ＬＡＴＥＲ ―― 3
ラブレターという名の果たし状 ―― 6
校長からのミッション ―― 9
デートの約束 ―― 12
後輩とのデート ―― 14
放課後　ｗｉｔｈ優里 ―― 18
説教？お願い？ ―― 23
幼馴染みとは ―― 25
明日香とデート　前編 ―― 28

日常

……朝が来た。
俺の名前は中谷陽介。普通の高校二年生だ。
俺にとっては地獄の朝なのだが、なぜかというと「陽く～ん♪」この
けたたましくもほんわかな声が聞こえてくるからだ。
「おはよう！陽君！」
「ああ…おはよう」
俺をおこしに来たこの女は幼馴染の桜井明日香。幼いころからの付き合いである。
このように海外にいる両親の代わりに起こしに来てくれたり、飯を作ってくれたりするので正直助かってはいるのだが。
「ほら、早く食べて！じゃないと遅刻しちゃうよ～」
「わかってるよ…いただきます、今日も上手いな」
「ふふ、ありがとう！未来の旦那様！」　「え？」
……だがしかし、最近は少し言動がおかしい。大丈夫だろうか。

今は学校に登校しているのだが…
ちなみに、今向かっている高校は蘭上学園という。全国から受験生が集まるマンモス校……らしいが、俺自身はあまり興味がない。
「おはよう明日香ちゃん！そして陽介も！」
「うん！おはよう海君！」
さて、俺と明日香に挨拶をしたこの男は成宮海。もう一人の幼馴染だ。
こいつも良いやつではあるのだが……
「いやー明日香ちゃんも痩せすぎだよ！や・せ・す・ぎ！」
デブ専という特殊な性癖の持ち主なので、イケメンという特性が生かされない。
「はあ……早く行かねえと遅刻すんぞ」
「ふっやっぱ陽介もツンデレだよな！」

「あ？」
「すんませんでした」
「あはは……」
　これがいつもの登校風景だ。
「おはよう～」
「おはよう！」
　教室に入ると、いつも明日香と海は何人かに挨拶される。
　俺は……察してくれ。べっ別に悲しくなんてないんだからね！
「おはよう、石垣君……どうしたの？いつもより黄昏てるけど」
「ああ……いや、なんでもない」
　俺に話しかけてきた男は霧生浩輔。名前に反して、かなり中世的な顔立ちをしているクラスメイトだ。
「分かった。桜井さんと成宮君は挨拶されたのに、中谷君だけ挨拶されなかったからでしょ」
「まあそんなとこ」
　すべてお見通しらしい。まあ、ぼやいてても友達が増えるわけでもないし、神がチートの如くコミュニケーションを授けてくれるわけでもないのだが。
「ちょっと陽君元気ないよー？大丈夫」
「だから大丈夫だって…まるで母親みてーだな」
「お！また陽介と明日香ちゃんの夫婦漫才が始まったぞ！」
　やめて、そんなこと言ってたらあの二人が反応してきちゃうでしょうが！
「そ、そんな夫婦だなんて…」
　いや、だからなんでそんなにお前は顔を赤らめてるの？…どうせあの二人は昼休みに来るだろうからな～…帰りてえ。
「は～いみなさーんＨＲを始めますよ～」
　うちの担任の今泉千秋先生が来た。一日が始まる。

LATER

……昼休みになった。
いつもの連中と食べようとすると、
「せ～んぱい！」
……もの凄く甘ったるい声が聞こえてきた。この女は那倉茉菜。
一つ下の後輩である。
今年の入学式の偶々ナンパにあっていたので、それを助けたらここまで懐かれてしまった。
「お！茉菜ちゃん、一緒に食べようよ！」
「では先輩、一緒に食べましょう！」
「（・ω・）」
……どうやら海は無視されてしまったようだ。ドンマイ！
さて、俺としてはあまりこいつと一緒にいたくない。なぜなら……
「……」
「……」

女三人組がとてもピリピリするからだ。ぴえーん！
え、三人いないって？…すぐ分るよすぐ。
「それで～なんで茉菜ちゃんはうちの教室にいるのかな～？」
「そりゃ～先輩と一緒に食べるためですよ！」
「……先輩って誰？」
「やだな～中谷先輩に決まってるじゃないですか～」
「むぅ～」
「ふふふ」
……まじで誰か何とかして！この状況！
「あらあら、これはどういうことかしら？陽介くん？」
……どうやら俺の心労が無くなることは無いらしい。

今の女の人は鳴河優里。一つ上の先輩で、蘭上学園の生徒会長であ

る。
　鳴河先輩もなぜか俺のことを気に入っている。迷惑極まりないのだが……
「ちょ……鳴河先輩も来ちゃったんですか」
「だめですよ～たっくんは私の旦那様なんですから！」
　そういうことを言うからややこしくなると言うのに。……どうやら女三人寄れば姦しいというのは、間違いではなかったらしい。
「私は邪魔じゃないわよねぇ？霧生くんと成宮君？」
　優里先輩が不敵な笑みを浮かべて言う。
「あはは……はい」
「も、もちろんです！」
　どうやら男子連中も、優里先輩には逆らえないらしい。もっとも…
「さあ、陽介君、一緒に食べましょう？」
　言葉の圧力によって、逆らわせてくれないのだが。
「さあ先輩！私のお弁当食べてみて下さい！」
「陽君！私のお弁当も食べてくれるよね！」
「陽介君？私のは当然、食べてくれるわよね？」
　こ、こんなんじゃ落ち着いて食べれねぇ…
「お前ら、とにかく落ち着けえええええ！」

　はあ、まったく昼は散々だった…
　ところで今は、授業も終わって放課後。
「あ、陽君一緒に帰ろ？」
「おい、陽介俺も一緒に帰っていいか？」
「ああ…まあいいけど」
　まったく、こいつらはまだ懲りてないんだな。まあどうせ茉菜と鳴河先輩もきっとお変わりなくお過ごしなのだろうが…
　さて、そう心の中でぼやきながら下駄箱に行くと…
「……ん？」

「？陽君どうしたの？」
「いや…なんか手紙が入ってた」
「え…それって」
「お前ら先に帰ってろ、俺は後から帰る」
「ちょ、ちょっと陽く～ん！」
…手紙には屋上で待っています、とだけ書いてあった。やれやれ、これ以上面倒ごとを増やしてほしくないのだが。

ラブレターという名の果たし状

……屋上にいたのは、数十人の男だった。
あれはラブレターではなかったのか？いやよくよく考えれば字は荒々しかったような気もするが……
「お前が中谷陽介かぁ！」
「このハーレム野郎！」
「お前羨まし過ぎるんだよぉ！」
……ん？
何故俺はハーレム野郎とか言われているんだろう。まったく身に覚えがないのだが。
「なんで俺がハーレム野郎なんだ？」
「うるせえ！」
「お前はあの超可愛い桜井さんと幼馴染じゃねーか！」
「しかもめっちゃあざと可愛い那倉ちゃんには好かれてるしよ！」
「それで生徒会長には好かれてるとか！マジ人生どうなってんだよ！」
……どうやら俺があの美少女軍団と仲良くしていることが原因らしい。
まあそんなことじゃないかとは思ったけどさ、でも俺も好きで仲良くしてる訳じゃないことを分かってほしい。
「とりあえず、お前を一発ぶん殴らねえと気がすまねえ！」
ええー……何その超絶理不尽。
俺にどうしろと。
「取り敢えず一旦落ち着いてくれないか？」
そう言ったらますますあっちの怒りのボルテージが増してきた。
ヤバイ、まじでどうしよう……
「大丈夫？中谷君」
「おい！おまえらやめろよ！」
休戦状態になっていたら浩輔と海が助けに来てくれた。どうやら神はここにいたらしい。

「今のうちに逃げて、中谷君。ここはなんとかするから。」
言われるままに俺は屋上からこっそり抜け出した。

なんとか無事に家に到着したが、浩輔と海は大丈夫だっただろうか。心配になったので一応浩輔にメールを送ってみたら……
「心配いらないよ。海君がシメてくれたからね」
……結構というかかなり不安なのだが、大丈夫だろうか。まあ今は助けてくれたことに感謝しておこう。

……そして翌日、学校に着いたとたん、学校の生徒のほぼ全員がこちらを向いた。
嫉妬や憤怒、蔑みの目で見られているような気がするが、やはり昨日の件だろうか。
「ね、ねえ……何か凄い見られてない？」
「あ、ああ……確かに」
どうやら明日香と海も感じたようだが……
「どうしたの？三人とも」
「せんぱ～い♪どうしたんですかぁ？」
……噂の元凶がやってきた、マジ勘弁して！
全員揃ってしまった。どうなるんでしょうねえ……
「おい！あれが噂のハーレム野郎かよ！」
「え～マジ女の敵じゃん！」
……どうしよう、このままだと皆に被害が及んでしまう。
そんなことを考えていると……
「ちょっとちょっと、これは何の騒ぎですか！」
……担任の今泉千秋先生だ。騒ぎにきずいて駆けつけて来たのだろう。
しかしあまりめんどくさくしたくないのだが……
そう思っていると、先生がこちらを向いて……

「中谷君、これはどういうことですか！」
なんで俺？いや、そんなことよりも……
「い、いやーなんと言いますか自分が全ての元凶といいますか」
そう言うと、先生が凄い剣幕になり……
「と、とにかく一旦中谷君は先生に着いてきて下さい！」

……それで、俺は今学園長室にいる。
うーん、そんなにヤバイ問題だったかな？
まあ確かに恋愛を積極的に推進する学校なんて早々に無いと思うが……
さて俺がそこで学園長に言われた言葉とは……

校長からのミッション

……さて、俺は今校長室にいるわけだが、一体何を言われるんだろう…

流石に退学とかはないと思うが…だ、大丈夫だよね？

…心配になってきた。

「さて、中谷君？貴方は何故自分が呼ばれたか分かりますか？」

「は、はあ。まあなんとなくは」

「まあ分かっているとは思うけど、先日の屋上での事件、今泉先生から聞いたのですが、職員会議でも問題になりました」

まあそりゃそうだろうな…浩輔から聞いた限りだと、海が結構無理したらしからな。

暴力事件にはなっちゃうか…

ていうか、俺初めて校長先生と会ったんだけど。校長先生行事の時も挨拶に来ないからな。

「はは、まあ私にも色々と事情があるのですよ」

……心読まれてるし。どうやら俺の周りの人達には常識が通じないようだ。

「ちょっと校長先生！脱線してますよ！」

「ああ、ごめんなさい。…それで中谷君には事件について少しお聞きしたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

「あ、はい。まあそれくらいなら」

とは言ったものの、今はもう学活も終わって一時間目も始まってる。

明日香に海、浩輔も心配してるだろうなあ…

て、俺はいつからこんな考えを持つようになったんだ？

「？中谷君、どうかしましたか？」

いけない、いけない。考え事に没頭してしまったらしい。

「…まあいいでしょう、では中谷君、数人の男子生徒に絡まれた理由は桜井明日香さん、那倉茉菜さん、鳴河優里さんの三人と中谷君が仲良くしていることが原因ですか？」

……ん？なんか違う話になっていってないか？
「はい、自分はそう考えています」
まあ校長先生が言っている事は事実だから肯定はしておこう。
「…そう、分かりました」
…何が分かったのか知らないが、嫌な予感がしてきた。
「中谷君、貴方には必ずその三人のだれかと恋仲になっていただきます」
「はい、わかりま…ん？」
ちょっと待て、今この人はなんて言った？
恋仲？それってつまり…
「え、えええええ！」
「ちょ、ちょっと中谷君、校長室では静かに！」
「あ、す、すいません」
そういう千秋先生も、困惑した表情を浮かべている。
いやいや、付き合えって言われても…
「…つまり、三人の中の誰かと付き合えば、今回のような事件も少なくなるのでは、という話ですよ」
…少なく、ね。まあ俺も全て無くなるとは思っちゃいないが。
「でも、誰かと付き合う事によって、後の二人が悲しむ事にならないですか？」
「あら、良く考えているんですね。その通りだと思いますが、わが校としては、これ以上は面倒を見切れないのです。ああでも、屋上の事件については、とりあえず不問という事にしておきました」
…随分と無責任なんだな。
まあ、不問にしてもらっただけよしとするか…俺に海を咎める権利もない。
むしろ助けてもらった立場だからなぁ。
…にしても随分大きな問題を押し付けられたなあー。
結局、教室に戻る事が出来たのは、一時間目が終わってからだった。

「あ、陽君！大丈夫だった？」
「すまん陽介…俺がもっと穏便に解決出来てれば、大事にはならなかったのに…」
「いや、海の所為じゃない。むしろお前は助けてくれただろーが」
さて、校長先生に言われた事を、明日香達に伝える訳にもいかないしな。

……どうしようか。

デートの約束

……今は昼休み。
またあの三人が集まるのか…と胃が痛くなったが
「せ～んぱい♪一緒に食べましょう！」
「ああ…今日は茉菜一人か」
「ちょ、なんですかその反応！もっと嬉しがってくださいよ～」
どうやら今日は茉菜一人だけだったらしい。
「ああ、明日香ちゃんならさっき一年の男子に呼ばれてったぜ」
そうだったのか…まあ海が言うなら間違いはないだろう。てことは告白かー。まあ明日香も十分美少女の中に入ってるからな…俺はそんな奴から好意を持たれてるんだ。俺は幸せ者だな…
「ちょっとちょっと先輩！私と話してる時に明日香先輩の事考えないでください！せっかくのチャンスなんですからぁ…」
「ん？最後なんて言った？」
「な、なんでもないですぅ！そ、それよりも先輩！今週の土曜日、買い物に付き合ってくれませんか？」
「買物？なんでそんな面倒くさい事…」
「後輩のお願いは素直に聞いて下さい！」
今は木曜日か、つまり二日後…でも、そうかこれはデートだ。俺には誰かと付き合うという使命がある。それを考えたら、少しは茉菜の事を知っといたほうがいいかもしれないな。
「…分かった、行くよ」
「！本当ですか、絶対ですからね！」
はあ、これからこんな日々が続くのかぁ…

……放課後になった。
「…ねえ、陽君？休み時間に茉菜ちゃんが凄く嬉しそうにしてるのを見たんだけど、なにか知ってる？」

…オワタ。さてどうしたもんか。
「ああ、明日香ちゃんそのことなんだけど…」
お？海が明日香を廊下に連れていったな。……てすぐ帰ってきて…なんで明日香は顔を赤らめてるんだ？
「そ、それじゃあ陽君！今日は一緒に寝ようね！」
「…え？なんでそんな話になってんの？」
そう言うと海がざまぁみろ、という表情で俺を見てきた。あいつは何がしたいんだ…明日香を治めてくれたのは感謝するけど…いや感謝できねえな。
「いや寝ないからね？」
「…ちょっと海君？話が違うんだけど…」
「い、いやそれは…おい陽介！話合わせろよ！」
「知らん、自業自得だ」
そうすると今度は逆に明日香が海を廊下に連れていった…この隙に帰ろう。

……学校から帰って今は家にいる。
「ふぁ～そろそろ寝るかピロリン♪…」
ちっ、こんな時にメールか…一体誰だ？
「先輩！明後日は１０時に駅前に来てくださいね！ちなみにやっぱ行かないとか言い出したら…分かってますよね？」
…後半こえーな。ていうか時間くらい明日言えばいいものを…
「分かったわかった、ちゃんと行くよ」
「…ホントですよね？言質とりましたよ！」
あいつも入念だな・・はあ、明日から憂鬱だなー。

後輩とのデート

……めんどくせえ。

今日は土曜日。約束通り茉菜と買い物に行かなければならないのだが…なんか嫌な予感がするんだよなぁ、まあしょうがない、準備しよう。

「ねえねえ、俺たちと一緒にお茶しない？」

「いえ、私彼氏待ってるのでそういうのいいです」

「そんな女待たせるような彼氏置いといてさぁ！一緒に行こうぜ！」

「ちょ、引っ張らないで下さい！」

……さて、１０時前に駅前に来てみら訳だが…男二人になんか知らない女の人が絡まれてるなー。うん、知らない知らない。

「あ！せんぱ～い！遅いですよ！」

おい先輩、呼ばれてるぞ。誰か知らないけど。

「え？お前この子の彼氏なの？」

「…全然釣り合ってなくね？」

「先輩！無視らないで助けて下さい！」

…ああくそ、せっかく無視しようと思ったのに、だから嫌な予感がしたんだよ…

「おいお前ら、こいつに手ぇ出すんじゃねえよ。一応連れだ」

「は？今この子と用があんだよ。お前は邪魔」

「そうだそうだ、お前に用はねえんだよ」

……さすがにムカついてきたぞ。実力行使してもいいけど…

「…私は先輩に用があるんです。行きましょ、先輩！」

「え？お、おい！」

「お前、あんなこと言って良かったのかよ…」
「…先輩をバカにしたんです。当然ですよ」
　重苦しい雰囲気になっちまったな…こいつもそれなりに勇気をだして俺を誘ったんだろうに…
「それより、悪かったな。最初に助けなくて」
「！本当ですよ…まったく」
「で？なんで俺の事を彼氏って言ったんだ？」
「あ、あれは逃げる時の口実として…まあちょっと優越感に浸りたかったんですけど…」
「…後半聞こえなかったけど、まあそういうことにしておこう」
　まあこうなったのは俺の責任でもあるしな…これ以上問い詰めるのも気が引ける…
「…この話やめましょう！先輩、あそこの服屋行きません？」
「まあ、いいけど」

「先輩！どっちの服がいいと思いますか？」
「え～どっちも同じなような…」
「ぜんっぜん違いますよ！先輩の目は節穴ですか！」
　……服選びに手伝わされてる途中なんだが、正直言って女子のファッションとかよくわからん…ていうかなんで女子ってこんなに買い物に時間かけるの？もう一時間もたってるんだけど…はあ。
「も～先輩！真面目に考えてください！…取り敢えずこれ着てみますから、感想お願いしますね！」
　…着替え室に入っていった。感想って何言えばいいんだよ…
「先輩、いいですか開けますよ？」
「早いな…ああ、いいぞ」
　なんて言えばさっぱり分からん…って
「……」

「…なんで何も言わないんですか。恥ずかしいんですけど」
「え？あ、ああごめん。似合ってると思うぞ」
　…こいつってこんな可愛かったっけ？いつもよりめちゃくちゃ可愛く見えるんだが…
「!?あ、ありがとうございます…」
「…なんでそんな驚いてるんだよ」
「だって…先輩から褒め言葉を言われるとは思ってなかったので…」
　おいおい、俺はそんな風に思われてたのか…一理あるな。
「……」
「……」
「…な、なんか言えよ…」
「せ、先輩が言ってください…」
　なんか、気まずくなっちまったな…しょうがない。
「…なあ、茉菜。この後夕飯食べに行かないか？」
「先輩が誘ってくれるなんて…明日は槍でも降りそうですね」
「そんなわけないだろ！…はあ、行くぞ」
「ちょ、待って下さいよ～！」

「先輩もこんなお店知ってるんですね～」
「いや、小さい頃に両親に何回か連れてってくれたんだよ」
「へえ～って！ていう事は、先輩の家ってお金持ちなんですか！」
「違えよ…まあ、今は親は海外にいるんだけどな」
「え、そうなんですか！てことは私が先輩の家に行けば…」
　…また後半聞こえなかった、俺耳悪いのか？…いやそれよりも手持ちの金足りるかな…ここのレストラン高校生にとっては地味に高いんだよな。挑戦するよりはましだと思ったんだが…
「先輩！このパスタすっごい美味しいですね！」
「…そうか、そりゃ良かった」
　まあ、茉菜も喜んでるみたいだし、よかったかな？

「ふふ、先輩！また来ましょうね！」
「いや、俺としてはもう来たくないんだけど…」
「もう！そんなこと言わないで下さいよ～必ず来ましょうね！」
「はあ…そうだな」
……結論から言うと、ギリギリ足りた。マジギリギリ。…疲れたけど、楽しかったな…

放課後　ｗｉｔｈ優里

「陽介君？なんで土曜日は茉菜ちゃんと駅前に居たのかしら？」
…怒りのオーラが漂っているのは気のせいだろうか。……今日は月曜、登校中に鳴河先輩に出会ったのだが、爆弾発言をされたんだけど見られてたのか…ていうかそれを言うと…
「…陽君？やっぱり茉菜ちゃんとデートしたんだ…どういう事なのかな？」
…俺の隣の魔王様がお怒りになるんだよぉぉぉぉぉ！なんで俺が怒られなきゃならないの？ああ、神様、どうかお慈悲を…
「明日香ちゃ～ん？ダメだよ～未来の旦那様に怒っちゃ。見放されちゃうよ～」
「…は！そ、そう？玲奈ちゃん？」
「うんうん、だからこの場は静かにしようね～」
「ちょ、ちょっと玲奈ちゃん！引っ張らないで～！」
…命拾いにはなったな。今のは九十九玲奈。クラスメイトである。今みたいに明日香のストッパーをしてくれるから、正直助かっているんだけど…玲奈の体型は、ちょっと、まあ、なんていうか…ふ、ふくよか……
「…玲奈ちゃん、やっぱいつ見ても可愛いよな～」
「…海の芸術的感性はよくわからん」
別に玲奈をバカにしたいわけじゃないのだが…まあデブ専にはデブ専の感性があるんだろう…分かりたくもないけど…
「お前らいいカップルになれるよ、うん…」
「！やっぱ陽介もそう思うか！いや～だよなだよな！」
そう思うっていうか、海の相手がめんどいだけなんだよ…
「…ちょっと置いてけぼりになったけど、陽介君？今日の放課後、私に付き合ってくれない？」
「…生徒会長が放課後に油売っててていいんですか？」
「うふふ。大丈夫よ、今日のために土日で仕事を終わらせといたから…」

そう言う鳴河先輩は不敵な笑みを浮かべる。…まあどうせ先輩は拒否権くれないんだろうし…
「…わかりましたよ。放課後ですね？」
「ええ、お願い」
鳴河先輩はニコっと笑みを浮かべる。…まったく小悪魔な言動がなければ可愛いものを…
「あら、可愛いなんて…ありがとう、陽介君」
…やはり俺の周りの人間が心を読めるのは間違っている。
「て、やば！もうすぐ予鈴鳴るぞ！」
「やば…そんじゃ鳴河先輩、また後で」
「ええ、また放課後」
さすがに生徒会長を遅刻させるわけにもいかない。急ぐか…

……さて放課後、急いで校門へ行ってみると…
「先輩…来るの速くないですか？」
少なくとも俺はＨＲ終わってすぐに校門に来たはず。なのにすでにもう先輩が待っているって…
「ああ、ちょっと生徒会長権限使ってね、早く授業抜けさせてもらったの」
心読まれた…ていうかそれって職権濫用なんじゃ…
「ふふ、細かい事は気にしないの。それより早く行きましょ？」
「ああ、はい…て、なにしてるんですか！」
「なにって…腕組んでるだけよ？」
その腕組んでるのが問題なんだよ！まだここ校門なんだから…
「おい、見ろよ！会長が男と腕組んでるぞ！」
「マジかよ…あいつ羨ましすぎだろ！」
「てかあいつ、屋上で問題起こした奴じゃね？」
ほら～なんかひそひそ聞こえるし～…鳴河先輩も自分の人気自覚してほしいんだけどな～。ていうか屋上で問題起こした奴って…あ

れ俺悪くなくね？
「ほら、野次馬なんて気にしないで行きましょう？」
「ちょ…鳴河先輩！引っ張らないで下さい！」

「…で？鳴河先輩？どこに行くんですか？」
「う～ん、本当は陽介君にエスコートしてもらおうと思ったんだけど、いきなりだしねぇ…私の家でもいい？」
「え…でも鳴河先輩の親御さんに迷惑じゃないですか？」
「大丈夫よ。今日は二人共用事でいないから」
「まあ、それならいいですけど」
…勢いで了承しちゃったけど、大丈夫だよね？…まあここは鳴河先輩を信じよう。
「ここが私の家よ」
「…結構普通なんですね？」
「…それはどういう意味かしら？」
「い、いや～先輩ってお嬢様なのかな～と思ってたんで」
「…それいつも言われるのよね。なんでかしら？」
多分、先輩の容姿と言動が原因だと思います。ハイ。
「…まあいいわ。ただいま～」
鳴河先輩がそう言って玄関に入ると…
「おお！優里、おかえ…誰だ！この不届き者は！」
「ちょっとお父さん！陽介君を不届き者なんて言わないでください！」
「そうですよ貴方。初対面の方にそんなこと言わないで下さい」
……いや、ご両親居るじゃないですか先輩…ていうか不届き者って言われたし…
「申し訳ありません私の夫が。取り敢えず上がって？」
「あ、はい。お邪魔しま～す…」
…ふう、どうやら鳴河先輩のご両親同士で反対の印象を持たれたら

しい。
「ふふ、でも珍しいわね。優里が誰かを連れてくるなんて…」
「え?そうなんですか?」
…驚いた。先輩って社交的なイメージがあったから…
「ええ、そうなの。…ところでお夕飯食べていかない?さっきのお詫びもしたいし…あ、でも無理にとは言わないわよ?」
…どうしようか、まあ特に断る理由もないし…
「分かりました。御馳走になります。」
「ありがとう。ああ、忘れてたわ…私は優里の母、鳴河優良です。よろしくね」
「あ、はいよろしくお願いします。自分は中谷陽介です。鳴河先輩とはいつも仲良く?させてもらってます」
「ふふふ、そう…まあいいわ。貴方!優里!中谷君も食べてくそうだから、一緒に食べましょう」
「何!あの男も一緒に食べるのか!…許せん、今すぐ出てけ!」
「…お父さん?それ以上言ったら喋らせないよ?」
「(・・ω・、)」
「あ、あはは…」

「ふう、ご馳走様でした。とてもおいしかったです。」
「あら、ありがとう。そういうお世辞は優里に言ってあげてね」
…お世辞じゃなくて本当にうまかったんだけどな…
「優里、中谷君をお見送りしてあげて?」
「分かってるわ、お母さん」
今思ったけど、この二人って似てるよなー。さすが親子というべきか…ちなみに鳴河先輩のお父さんはさっき自分の書斎に向かって行った。え、なんでって?…察してくれ…
「今日はありがとうね。陽介君」
「いえ、こちらこそ御馳走になりました」

「じゃあ、また明日ね」
「……」
「…どうしたの？」
「い、いえすいません。それじゃあ」
……今の先輩の笑顔、凄く可愛かったな……

説教？お願い？

……鳴河先輩の家にお邪魔した夜、今はマイハウスに向かっているのだが…鳴河先輩の家に行ったの見られてないよね？また嫌な予感が…

「陽く～ん？今日はどこ行ってたのかな？」

…やはり明日香が待っていたか…

「お前、何してんだこんな時間に」

「こんな時間って…まだ8時前だよ…ていうかどこ行ってたの！せっかく一緒にお夕飯食べようと思ったのに…」

「一緒にって…いくら家近いからってお前飯作るのは朝だけだったんじゃないのかよ…」

「いいじゃんいいじゃん！今日は陽君と食べたくなったの！ていうか陽君…今日どこ行ってたの？」

「え…ああいや、海と浩輔と一緒にゲーセンに行ってたんだよ」

「嘘。海君と浩輔君、今日は二人で一緒に帰ってた」

「あ、あれ～そうだったかな…」

「誤魔化さないで。陽君本当はどこ行ってたの？それとも…私には言えないような場所？」

……どうしよう。言ったら確実に何かが起きる。悪い何かが…でも言わなかったら言わなかったで何か言われるんだろうなぁ…もう限界かな。言っちまうか…

「えっとだな、今日は鳴河先輩の家にお邪魔してたんだ」

どうでもいいけど、この会話ってなんか浮気を疑われてる夫婦みたいになってないか？…て、いかんいかん、こんなどうでもいいこと考えてると…

「……」

はい、無言ですね～分かります…じゃなくて！やばいどうしよう…

「…陽君？鳴河先輩の家に行って、何してきたのかな？」

「い、いや～いつも先輩にお世話になってるからそのお礼で…」

「お礼って、そんなに鳴河先輩にお世話になってなかったでしょ？…

もういいよ、陽君。そんなに誤魔化したいのなら……」
「ご、誤魔化したいのなら？…」
「……えーい！」
「お、おい抱き着くな！…とにかく！中入るぞ！」
「えへへ～」
「えへへじゃない。ほら、夕飯食べたら帰れよな」
「むぅ～…最近陽君冷たいよ！私の旦那様なんだから、もっと私にかまってほしいのに…」
「旦那様って…俺とお前は結婚してないし、する気もない」
「え……」
　あ、やば……これは墓穴掘ったか？
「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで陽君は私の旦那様なのにどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして」
　……怖え！怖すぎるよ俺の幼馴染！お父さんこんな子に育てたつもりはありませんよ！
「ねえ陽君？今日…一緒に寝ようよ。もちろん寝てくれるよね？私の旦那様なんだから…」
「い、いやあ明日香の両親が心配するんじゃないか？いきなり俺の家に泊まるとか…まだ伝えてないし」
「大丈夫だよ。私が夜帰ってこなかったら、陽君の家にいるって言ってあるから」
　いや根回ししすぎだろ。ていうか明日香の両親それでいいのか…まあ翠おばさんとかは昔からこんなんだった気がするけどな…
「わかったよ…その代わり、変な事はすんなよ？」
「もちろん分かってるよ！そんなに私って信用ないのかなぁ…」
　いやいや、さっきまで呪文を唱えてた人が何言ってるんですかねぇ……

幼馴染みとは

「……ふぁぁぁぁ…眠い」
　やっぱりソファで寝るのは慣れてないからな。少々堪える……え？なんで俺がベッドで寝てないかって？…明日香と寝るのを回避したに決まっているでしょう。めんどい事になるからね…
　もちろん明日香はまだ寝ている。この隙に家を出れば！
「ねえ、陽君？なんで一緒に寝てくれなかったのかな？」
　はい残念起きてました～
「そりゃお前と寝たらまずい事があるからに決まってんだろ！」
「そ、そんなことしないよ～私をなんだと思ってるのかな？」
「何故言いよどんだ…そういうところが心配なんだよ…」
「別になにかするとかしないとか関係ないじゃん！」
「いやだから…その、年頃の男女が一緒に寝たら問題があるだろ？」
「？問題って何？」
「いや気づけよ……」
「なんで～小さい頃は一緒にお風呂も入ったじゃ～ん」
「今は違うだろ…その、お前も可愛くなったからな。俺が困るんだよ」
　[!?陽君今可愛いって言った!?]
「え？あ、ああいや、今のは言葉の綾で…」
「でへ、でへへへへへ～陽君が可愛いって言ってくれた～」
　……だめだこりゃ。こっちの声も聞こえてないみたいだしな…
「お前、自分の家に戻らなくていいのかよ……」
「……ハッ！な、何言ってるの？いつも私が朝ごはん作ってるじゃん」
「いやそうじゃなくて、登校の準備しなくていいのかって事」
「それは大丈夫！昨日のうちに必要な物は持ってきてたからね！」
「いつの間に……まあいいや」
「うん！今作るからね！」

……そういえば、明日香にはいつから色々世話してもらってたっけ…親父達が海外行ってからからだからな。いつもなんだかんだ言って明日香には世話になってるし、なんかしてやった方がいいんかな…
「陽君！朝食できたよ…て、何ずっと考えてるの？…は！まさか私との結婚を…」
「ちげえって。そんなんじゃなくてだな…」
……どうしたもんか。正直に言うか…て、本人じゃん！何言ってんだ、俺…
「…明日香、今日の放課後に一緒に駅前に行かないか？」
「ふぇ？それってデートのお誘い!?」
「デートじゃないけど…まあ明日香にはいつも世話になってるからな。その労いだよ」
「陽君がそんなことを言ってくれるなんて…玲奈ちゃんに自慢しなくちゃ！」
「お、おい！せめて朝飯食べて…」
……行っちまった。てか、せめて朝飯食ってけよ…

…うめえな。

「お！どうした陽介！今日はおせえじゃねえか、それに明日香ちゃんと一緒に登校してないし」
「海か…別になんでもねえよ」

「おはよう中谷君。確かに珍しいね、桜井さんと一緒に来てないのは」
「はは、別に心配しなくても大丈夫だよ、浩輔」
「…なんか浩輔と俺で反応が違くねえか？」
…二人共よく気づくな…たった一日、それも朝の登校でだけでこんなに心配されてもな…
「そりゃ気づくだろ。二人を小学生の頃から見てきてるんだからよ」
…ねえ、俺声出してないよね？どんだけ心読まれればいいんだろうか…

明日香とデート　前編

……今は放課後。
あの後明日香と一応約束をして、駅前に集合しているんだが、明日香が来ない…
まあ、俺には女心なんてさっぱり理解できないんだけどさ…
でも、それならわざわざ駅前で集合しなくても学校から行けば良かったんじゃないかと思うわけですよ…
「おーい、陽君！はぁはぁ…ごめん、待った？」
「ん、明日香か…いや、そんなに待ってないよ」
「……!?」
「…お前はなんでそんなに怒ってるんだ…」
「いや、えっと、だって、陽君がデートするときの決まり文句を言えるなんて思ってなかったから」
「…お前は俺を何だと思ってたんだ…」
「あ、あはは。陽君ごめんね～」
「…はあ、まあ別にいいけどさ。…それで？どこに行くんだ？」
「え…はあ、やっぱりいつもの陽君だよ。まいっか、あ！そういえば駅前に新しいカフェができたらしくて、そこが結構評判いいんだよ！いってみよ！」
「ここも駅前なんだけどな…」
「ぶー細かいことはいいじゃん！いいからいこ？」
「お、おい！引っ張んなって！」

……駅前はいつも通り大勢の人で賑わっている。老若男女問わず

通勤通学旅行などで使われたり、色々な施設を求めてきたりする人も多い。
　まあ自分もその一人であるわけなのだが……
「えへへ～」
「どした？なんか嬉しそうだけどなぁ」
「えーだって陽君と二人で出かけるの久しぶりなんだもん。嬉しいにきまってるよ！…最近は茉菜ちゃんとか、鳴河先輩とかとずっと一緒だったから…」
「まあ、確かに。最近放課後忙しかったしなー」
　考えてみれば、昨日は鳴河先輩の家にお邪魔して、数日前は茉菜と休日出勤……確かに明日香と接してなかったかもなー。…あれ？俺最近女子と接しすぎじゃね？いつからこんなにリア充になったんだ？
「……むー」
「ど、どうした明日香？」
「…陽君、他の女の子のこと考えてるでしょ！まったく、今は私と一緒にいるんだからさ、私のことを考えててほしいんだけどなぁ……」
　…そうだった、今は明日香と二人きりなのだ。さすがに失礼だったか…て、あれ？
「いや、お前がこの話振ってきたんだろ！俺悪くなくね？超絶理不尽じゃね？」
「さ、さあーなんのことかなー？ワタシワカラナイヨー」
「そんなエセ外国人みたいに言っても無駄だから…ほら、あそこがお前が言ってたカフェだろ？行こうぜ」
「う、うん（なんか今日の陽君いつもより男っぽくて頼りになるなぁ）」
「ん？どうした、ぼーとして」
「え？う、ううん大丈夫考えことしてただけ。」